

---

# 距離

諒夏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

距離

### 【Zマーク】

N4367C

### 【作者名】

諒夏

### 【あらすじ】

恋人になつた二人だけ、情事の後、彼女はふとした寂しさを感じてしまいます。たつた一枚の壁を隔てた部屋の距離。でもそれが彼女には寂しく感じてしまい…

(前書き)

恋人になつて、身体を重ねても…この距離だけは寂しい。

真夜中過ぎくらつに目を覚まして見れば、隣で眠っていたのは安らかな顔をした彼。

そのことに驚き、起き上がりしたが、眠っていても離そつとは想つていよいよで、まるで大事な宝物を手に入れた子供のように抱きしめる彼。さうして、動けば起きてしまうだろう事は容易に想像できた。

”今、何時だろ？”

なんとか視線だけを上に向けて時計をとると、時計の針は真夜中を少し過ぎたくらいの時間。

”まだ・・・こんな時間なんだ。”

あんまり時間が経過していない事に驚いた。  
結構長い時間が経過していると想つてたから

とにかく、この腕の中から出なければ…

なんとなく、恥ずかしいというのが先だつてそう想つてしまつた。

抱きしめる指を一本ずつ解きながらゆっくりとベッドを抜け出す。  
起き出すかな？と思いながら、なんとかベッドから抜け出た。

床に散らばる衣服を片手に抱え、とりあえず、下着はいいか…。  
とか考えながら身に付ける。  
これから自分の部屋に戻つて、シャワー浴びて…

ドアに手を掛けた時、振り向いたけど別に起きている様子もない。その事に安堵してゐる自分と寂しいと想つ自分がいる。

抜け出しておいてなんだなんだが、少し寂しい気がする。

これってわがままだらうか？

いや、わがままだらうな。

今まで想つた事のない感情に戸惑いながら彼の部屋を後にした。

シャワーを浴びて、浴室に戻ると寒いなつて想つた。

暖かくしても少し寒い。

薄い壁の隣には彼の私室があつて、それ今までいたのにずいぶん遠く感じる。

たぶん、寝息を小さく立て寝てるんだろうな……

そう想つとふと壁に背中をつけて目を閉じる。

朝、顔あわせられるかな？

顔がほてりそうで怖い。

いまだき、こんな子いなうだらうなつて。

でもうまく話せるかは不安。

初めてつて辛いって聞いてたんだけど、これも人それぞれなのかな？確かに出血はあつたし、腰もだるいし、変な感じはするんだけど。でも、こつこつこつて寂しいね。自分の意思で出てきたんだけど、戻りたいって想つのは……どうしてだろう？

涙が出てきた。

嬉し涙か、寂しいって想つてゐるのか、わかんないけど、わかんない  
けど・・・  
泣けてきた。

でも戻る勇気なんてないもん。

抜け出してきて戻る勇気なんて・・・

一枚の薄い壁が距離を作る。

乗り越えられるくらいの壁なのに。。。

如何して・・・

だんだんとマイナス思考に変わっていく。  
目がさめたら全部夢なんじやないかつて。

結局、目が冴えた私はそのまま壁に寄りかかって座り込む。  
布団をすっぽりとかぶつてしまお~と何の変哲もない部屋の空間を見  
つめる。

やけに時計の針の音が耳につく。

一緒に暮らし始めたのは本当に偶然。

何の変哲もなく、ただ、ルームメイトを紹介してゐる男の子と出会つ  
ただけ。

しかも両方の同居人が同じ職場で偶然ばつたり逢つただけ。

それから少しずつお互いに話し始めて、職場の近くで互いが働いて

る事が分かつてから、じついう関係になつた。

その友人を思い出し、携帯を開いた。

たぶん、あの人なら起きてるだろうなって。

携帯を取り出し、メールを打つ。

数分すると返ってきて、それに対してまたメールを打つ。

隣といつても壁を隔てた本当にお隣さんだが…

この時間なら起きてるかな～って想つて…

同じような生活してるし、互にまだぎこちないとこもある。  
だから辛くなつたらメールしたり、遊びに行つたりして、なんとか  
自由気ままにさせてもらつてる。

『疲れてる彼起こして話なんてできないもんね  
』

そう返信するとすぐに返信が来た。

『だよね～、まだ戸惑うわ』

『なんか、夢見てるんじゃないかなって想つ』  
『次の日起きたら一人だつたりして？つて？』  
『うん。想つ。悠里は想わない？』  
『想つよ。でも朝いるし、現実なんだな～って。』  
『相当ラッキーなんだよね、私たけ  
いい人だしさ。』

『だろうね。』

今の世の中誰からかまわず信じたら危ないもんね。

『明日、カラオケでも行かない?』

『明日いつかもう今日だよね?いいね、行こうよ』

『じゃあ、後数時間したらね〜』

『うん。』

携帯を閉じてベッドサイドに置く。  
また静寂が辺りを包む。  
こてつて寝つころがつて毛布かぶつて蹲る。  
丸まつてると安心するんだよね〜、私  
猫みたい。

そう思いながら田を開じてじっとただ時が過ぎるのを待つ。

時計の音がやけにリアルだ。

カチッカチッカチッ…

秒針を刻む音がやけに耳に着く。

たかが隣…

されど隣なんだよね。

この壁一枚隔てた場所に…あなたはいる。

さつきまでいた場所なのに、今は違う場所に居るから…  
だから、ちょっと不安定になつてるのかな?  
自分から出てきたのにね…。

窓がカチカチと音を立てる。

きっと風が強いんだ…

そんな事考えてうずくまつてた毛布からかおを出した。  
天井が小さな光に照らされて少しだけ明るく見える。

不安定になるとつも田<sup>だ</sup>がうつろになる。

一点だけしか見てなくて、周りはぼやけて見える。

そんな瞬間が無…なんだと思う。

ぼや～～としてると小さくだけ壁をノックする音。

トントン。

指先で数回たたく音が聞こえる。

『起きてる?』

「…………うん。」

薄い壁だからすぐに声は聞こえる。

『風強いね』  
「…そうだね」

なんのへんてつもない会話。

だって、何か言つのも壁で仕切られてるここからだと独り言に聞こえちゃう。

なんか、変な人っぽいでしょ？

『…………』

「？」

バサツつて音がしてコツコツつて音が聞こえた。

壁に耳を当てたらドアが開く音がして、すぐに閉まる。

彼が部屋を出たのだ。

向かったのはリビングか…それとも…

「…………」

ビクッとして一瞬身構える。

でもそれはすぐにドアが開いて彼が顔を出した事で分かつてしまつた。

「なんか、壁に向かってしゃべつてると馬鹿みたいじゃん、俺ら」  
苦笑いを浮かべた彼はそつとドアを閉めて床に腰を下ろした。  
私もベッドから起き上がつてそつと近づく。

背伸びをして、ベッドに寄りかかって、こっちを見つめる彼。

「起きたらいなかつたからびっくりしたよ」

「…気持ちよさそうに寝てたもんね」

「…ああいうのには敏感だと思ってたの…」

「ああいうの？」

「…人の気配っての？」

不覚だ。

そういうて彼はちょっとといじけてる。

見たことのない彼の顔が年齢を下に見せる。

一瞬、失礼ながらかわいいと想つてしまつのは黙つてしまつ。

「でもなんでいなくなつたの？」

戻つて来ればよかつたのに。

「ん、なんとなく、ね、」

行きづらいでしょ？

「…じやあ、今度はオレが攫いに行くよ」

隣に居なくて、どんなにオレが心配したと思つてんだ？

むすつとした顔に苦笑いを浮かべた。

なんか、子供っぽい。

自分よりも年上の癖に、こいつは仕草はいぢもっぽいんだから。

「なあ～んだよ、笑つてさ」

「ううん、なんかさみしいって思つたの私だけじゃないんだなあ～つて安心してたの」

「…そうかよ。」

「うん。」

「じゃあ、一緒に寝よ。」

隣に居ないと寂しい。

彼がささやいてベッドに横になった。

本当に抱き合うだけで別にナニをするわけでもなく、眠るだけ。

”…安心した”

酷く安心して一人は目を閉じる。

ほら、違う距離だったのが、こんなにも近く感じる…  
それを実感する一人だった。

(後書き)

なんとなくこうこう寂しさありますよね?  
何の変哲のない言葉でも自分で想つてると人に言つてもうらつた後の  
感じが違う事。  
それを書きたかったんです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4367c/>

---

距離

2010年10月13日17時24分発行